

より安全な輸血医療のために —過去のインシデント・アクシデント事例から学ぶ—

奥田 誠

日本赤十字社 血液事業本部

【はじめに】 インシデント（偶発事象）は、患者に障害もしくは不利益を及ぼさないもので、ヒヤリとしたりハットしたりしたものを指す。一方で、アクシデント（医療事故）とは、医療行為により患者に障害もしくは不利益を及ぼしたものを指す。輸血療法での主なインシデントやアクシデントの発生要因は、集中力の欠如、緊急性による多重業務や、慣れや思い込みによって発生すると考えられる。輸血では、患者検体の採取から検査、血液製剤の保管管理、製剤の払出、輸血受領、輸血実施、副反応観察など様々なプロセスが存在する。そして医師をはじめ多職種が介在する業務である。特に、血液型不適合の事故は患者の生命に直接的に影響を及ぼすため、一連の手順を遵守し慎重な作業が必要になる。【輸血療法における注意点】 輸血前検体は、採血時の注意が重要である。事前に容器に添付された検体ラベルと、患者との照合後に採血することが原則である。同時に2名以上の在室患者がいる場合には更に注意が必要である。ABO血液型判定は、検査過誤防止のため2名以上の術者による判定を行うか、精度管理された全自動輸血検査装置の利用が望まれる。検査結果の報告時は、電子的な報告体制が転記ミス防止に有効である。口頭による結果の報告は誤認の可能性が生じるため行うべきではない。血液製剤の払出には、輸血管理部門から最小必要本数のみの払出を行う。病棟や外来での複数製剤の保管は、患者誤認の原因にもなるため原則行わない。輸血実施時には、血液製剤を単独ルートで実施する。他の薬剤との混注は、血液製剤の溶血や凝固などが生じる危険性がある。【最後に】 輸血療法は患者にとって大変効果の高い治療法である。一方で、様々な誤認が原因による不適合輸血で患者の生命に危険を及ぼす事例も存在している。輸血療法は、輸血検査から輸血投与に至るまで様々な職種が介在することから、手順を遵守し可能な限り輸血事故が起きないような対策を講じることが重要である。各医療機関で過去に起きた事例などを振り返り、自部署で起こり得る状況を考察し、多職種間で共有しながら検証することが必要である。